

日本近世史料に見るオーロラー1770年のオーロラをめぐる記録と認識ー

岩橋 清美(国文学研究資料館)

はじめに

本報告は1770年9月17日(明和7年7月28日)のオーロラを事例に江戸時代の人々がオーロラをどのように認識していたのかを考察するものである。

江戸時代のオーロラ記録をまとめた先行研究としては、大崎正次氏『近世日本天文史料』(原書房、1994年)・渡辺美和『続日本近世天文史料』(暫定版、2007年)がある。大崎氏が随筆などの編纂物から関連記述を収集したのに対し、渡辺氏は自治体史を中心に調査を行い、膨大な民衆層の記録を集積した。報告者は両者の収集史料を再検討すると同時に、これまで取り上げられることが少なかった大名・公家・武家・寺社史料を分析し、近世社会におけるオーロラ認識について考察する。

1 1770年オーロラに関する史料の概要

報告者が確認しえた1770年のオーロラに関する史料は、9月17日前後の記録を含めて約100点ほどである。このうち9月17日の記録は79点を数え、地域分布は北海道・東北地方16、関東地方6、中部地方22、近畿地方30、中国地方3、九州地方2となっている。記録作成者の社会階層は、公家4、武家20、町人3、百姓29、寺社8、不明15である。これらの数値は自治体史刊行の影響が大きい、記録作成者に占める百姓・町人の割合の高さは前代との大きな違いであり、文書主義の浸透が多様な人々の記録作成を可能にした証左でもある。

オーロラについて記述された史料は、①日記、②歴史書・村方旧記、③随筆・天文書・地誌に分類できる。日記は最も多く、全ての社会階層に共通する。日記は家および社会集団の存続のために書き継がれるものであり、オーロラは多くの場合、理解しがたい「天変地異」として記されている。歴史書は主として各藩および藩士によって編纂されたものが多い。村方旧記とは村の歴史や由緒等を記した史料で作成者の多くは村役人である。随筆・天文書・地誌類は読者を想定した知識人層の編纂物であり、風聞等の伝聞情報を多く含む。

2 近世人のオーロラ認識と対応

(1)オーロラを示す表現

オーロラを示す言葉はこれまで「赤気」「白気」が一般的であるとされてきた。これは古代・中世史料においては妥当であるが、近世史料には「赤気」・「白気」に限らず様々な表現が見られる。一例をあげると、「赤光」「赤雲」「紅気」「雲焼」「珍敷雲」等であり、「赤い」「赤く」「赤き」とだけ記されることも多い。これは記録者の階層が古代・中世に比して民衆層にまで広がったことによる。前近世における記録者のほとんどは漢籍に通じた貴族や寺社であった。しかし、近世に入ると一部の知識人層を除き、ほとんどがオーロラ現象を示す言葉を知らなかったため、目にした状況をそのまま書き残すことになった。多彩な表現は、まさに当時の人々の認識の有り様を示していると言えよう。

(2) 公家・武家の記録と認識

武家伝奏広橋兼胤は、その私的日記である「八槐御記」(国立公文書館所蔵、請求番号

古 040-0666) のなかで「自戌刻許北天赤氣、其色如火中有貫氣、漸々捧半天自西方色消滅、更於艮天消滅近世未曾有人々恐怖」と書いており、北の空に現れた「赤氣」に人々が恐怖する状況がうかがえる。このとき、兼胤は自家の日記を見直し同様の現象が 1631 (寛永 8) 年・1635 (寛永 12) 年にも起きていたことを明らかにしている。同じく公家である柳原紀光は『日本書紀』・『後愚昧記』といった古記録さらには『晋書』といった中国の史書をもとに、この変異の原因を探ろうとした。過去の史書類をもとにオーロラ現象を解明しようとする動向は公家や武家、国学者などの知識人層に共通する。

(2) 社家の記録と認識

京都伏見稻荷社の社家である荷田信郷は日記に刻々と変化するオーロラの動きを詳細に書き留めている。「赤氣之中二星も透見白氣一筋銀河ヲ貫キ」といった具体的な表現に特徴がある。このことから稀有な自然現象に対し、その詳細を記録することこそが危機を回避し集団を安定させる方法の一つだったことがわかる。また、当時、知識人層の中にはオーロラの原因を「地下に蓄積された熱」にもとめる者もいたが、信郷は江戸幕府の天文方の見解を注目しており、明確に天体現象と捉えている点が興味深い。

(3) 民衆の記録と意識

尾張藩藩士高力種信の随筆『猿猴庵随観図会』(国立国会図書館所蔵、請求番号特 7-59) にはオーロラの出現に混乱する人々の様子を描いた絵がある。そこには火事かと思いきや屋根に水をかけ、迫り来る火の手に備える人々や不安げに空を見上げる姿、祈祷をはじめ様子などが描かれている。オーロラは赤い色であることから、出現当初は山火事や海火事と理解されることが多いが、空一面に赤気が広がると火事とは異なる理解しがたい自然現象として恐怖の対象となった。人々は公家や武家の場合と同じように過去の記録に遡って現象を理解しようとするが、そこで用いられたのは文献ではなく村の古老の記憶であり、他地域からの風聞や噂話である。文字による情報管理が浸透しつつも、音声による情報を重視する点に民衆世界における基本的な情報伝達の有り様が看取できる。

おわりに

以上、雑駁ではあるが 1770 年のオーロラを事例に近世人のオーロラ認識や対応について述べてきた。記録や対応は社会階層により差異があり、公家や武家は自家・自藩に蓄積された記録や書物を用いて現象分析を行うのに対し、民衆層は老人の記憶や伝承・風聞によって事態を理解しようとした。とくに民衆世界において興味深いことは、祭礼・講・宮座といった村の宗教的な組織の帳簿に記し、それを集団の記憶として残したことである。オーロラは非常に稀有な現象であるため、その対応から各社会階層が社会の安定のために必要とする基本的な情報伝達・蓄積の有り方を看取できるのである。

[付記]

本報告は科学研究費補助金基盤研究 (B) 「近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的研究」 (研究代表者: 根岸茂夫) ・総合研究大学院大学学融合研究「オーロラと人間社会の過去・現在・未来」 (研究代表者: 片岡龍峰) の研究成果の一部である。史料の閲覧においては京都東丸神社にご協力いただいた。記して感謝の意を表する次第である。